

国立公園の自然

国立公園は、日本を代表する優れた自然の風景地が指定されてきた。生態学的な価値ではなく美しい自然風景という観点から指定したことで広大な地域の指定が可能となり、結果として、生物多様性保全上重要な地域の多くが公園内含まれてきている。国立公園は我が国の生物多様性保全における屋台骨としての役割を担っているともいえる。

1 生物多様性保全上重要な地域の保全

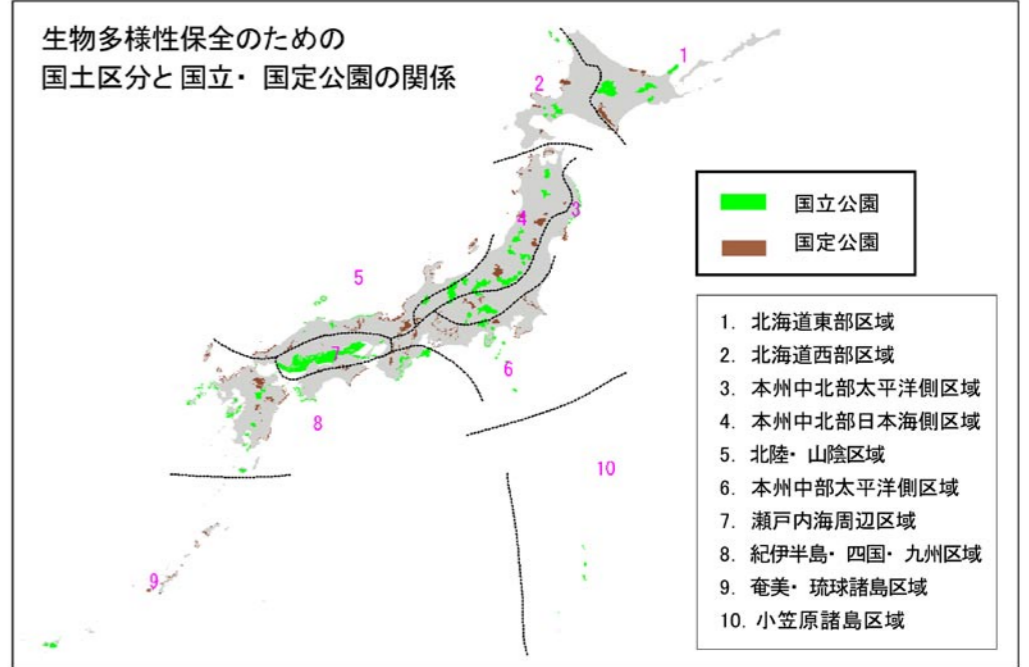


父島 (小笠原国立公園)

生物相から見た地域のまとまりを概括的に把握するために、生物群集を主な指標として、生物分布の境界線、積算気温、年間降水量を用いて全国を区分した結果、生物多様性保全のための国土区分(試案)は10地域に区分された。どの国土区分にも1地域以上の国立公園が指定されている。これらの国立公園は生態系ネットワークの形成においてコアとしての役割を期待されている。



知床五湖 (知床国立公園)



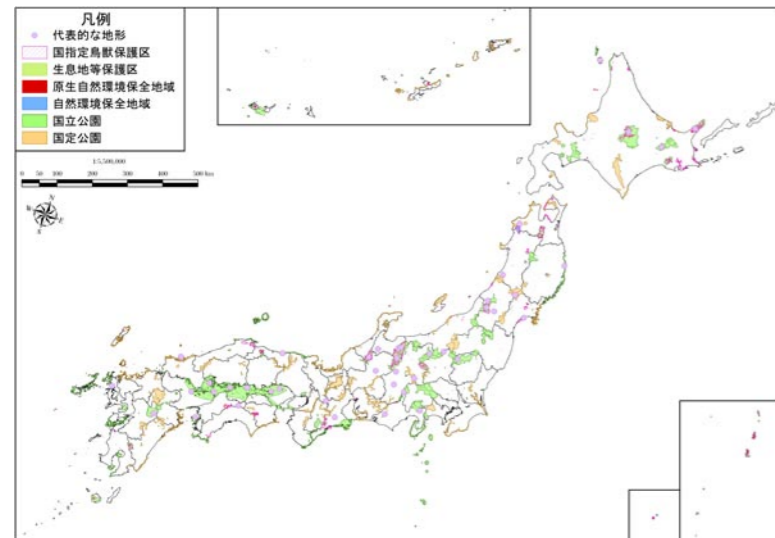
1. 重要湿地との重複

重要湿地とは、湿原、河川、湖沼、干潟、藻場、マングローブ林、サンゴ礁等のうち生物の生息地として規模の大きな湿地や希少種が生息している湿地のうちから重要な地域を500箇所選定したもの。

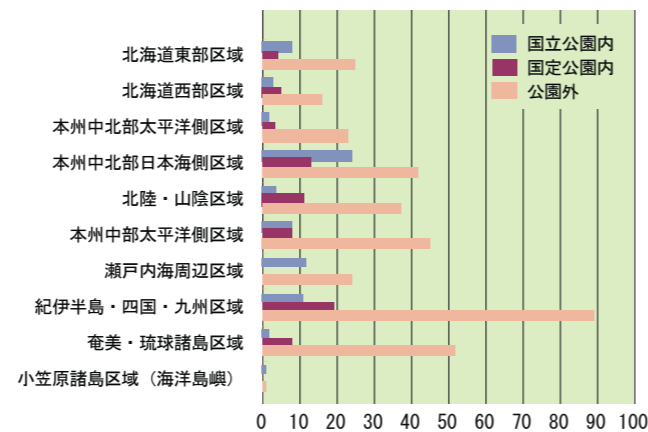
国立公園では、全国の重要湿地の15%をカバーしており、保護地域の中では最も広い面積をカバーしている。国土区分別に見ると奄美・琉球諸島等ではカバー率が低いが瀬戸内海周辺等では高くなっている。



尾瀬ヶ原 (日光国立公園)



国土区分別重要湿地数 (重要湿地数)



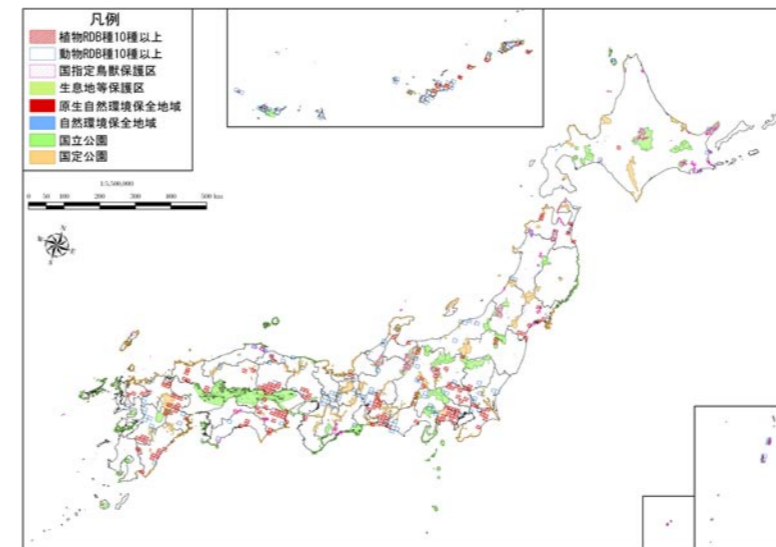
2. 重要地域との重複

重要地域とは生物多様性保全のための国土区分(試案)の各区域の生物学的特性を示す生態系を有する地域(重要地域A)及び区域内の環境要因の違いにより特徴付けられる重要な生態系を有する地域(重要地域B)として抽出された地域。

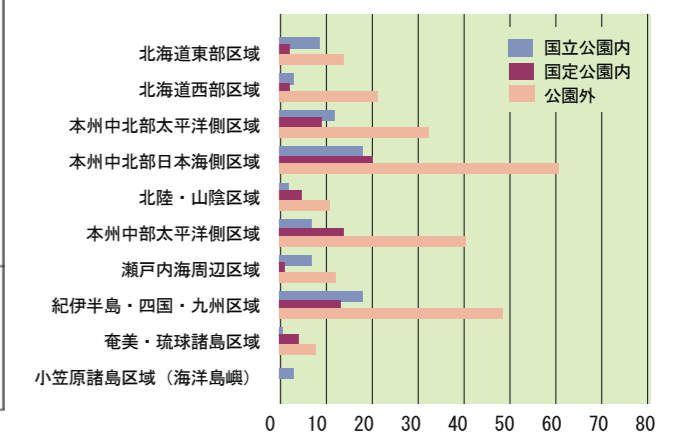
国立公園では、重要地域Aの約1/4、重要地域Bの約半分をカバーしており、重要な地域の多くが国立公園内で保全されている。



中禅寺湖と男体山 (日光国立公園)



国土区分別重要地域B数 (重要湿地B数)



国立公園の自然

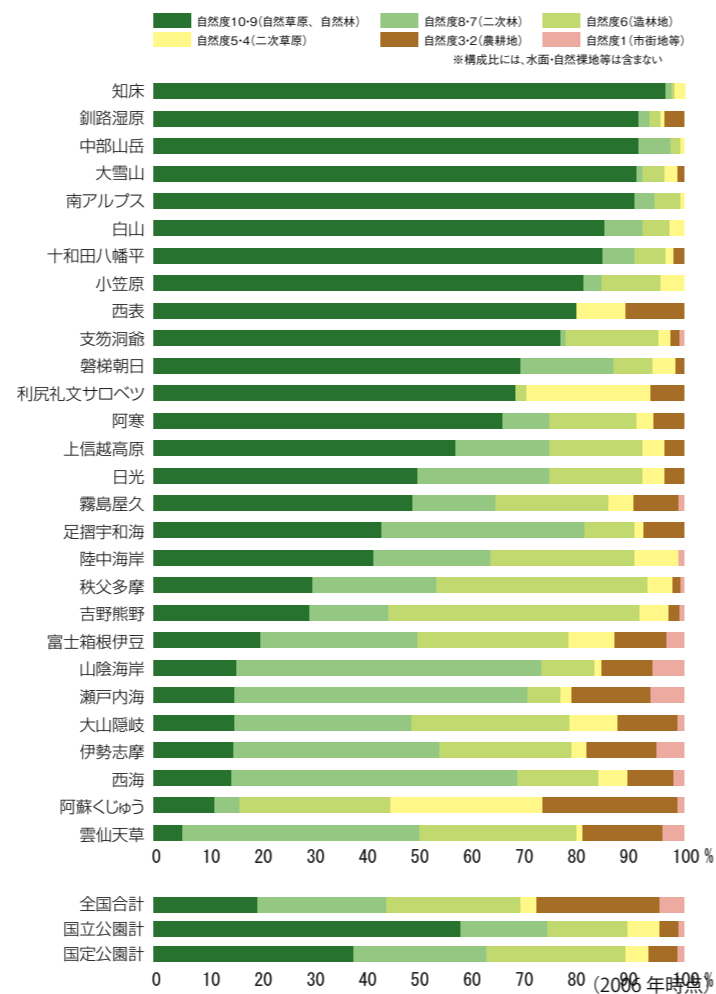
2 植生

日本列島は、南北に長いことから亜熱帯から暖温帯、冷温帯、亜寒帯までの広い気候帯を含んでおり、その違いを反映して植生帯も亜熱帯常緑広葉樹林から亜寒帯針葉樹林まで幅広く含んでいる。

植生自然度は、自然環境保全基礎調査の結果を用い、植生に対する人為影響の度合いにより、日本の植生を10の類型に区分したもの。国立公園では全体の6割程度が自然度10・9の自然植生であり、全国の自然植生の16%以上が国立公園内である。

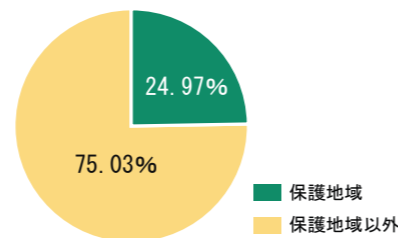
この自然度10・9の自然植生のうち、照葉樹林に限れば国立公園でのカバー率は6%余りにすぎない。一方、人為的な維持管理がなされてきた二次草原（植生自然度5・4）のカバー率が14%と高いことも特徴である。これは、草原景観を美しい自然風景として高く評価してきたことによる。

■ 国立公園の植生自然度別比率

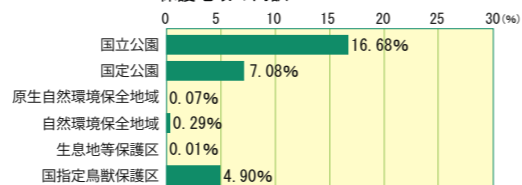


仲間川(西表国立公園)

保護地域による植生自然度9・10のカバー率



保護地域の内訳

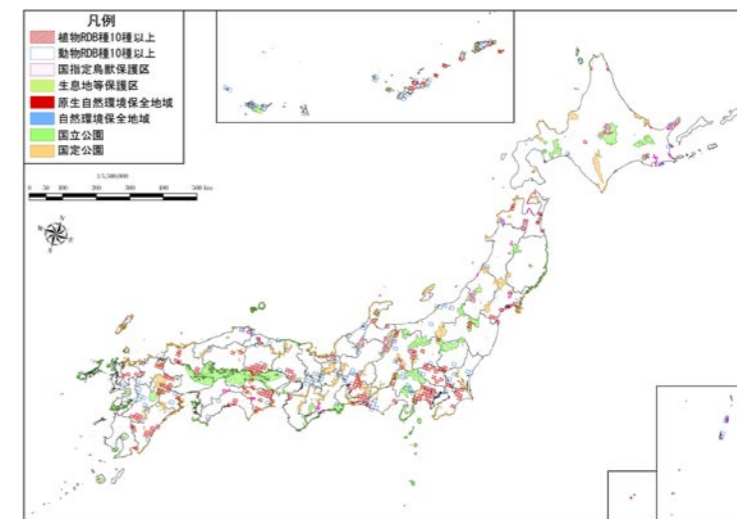


3 絶滅危惧種

環境省が作成したレッドデータブックに掲載されている動物・植物種が10種以上生息・生育している地点と国立公園との重なりをみると5%程度しかカバーされていない。これは、特に開発圧が大きかった平野部の里地里山等に絶滅危惧種が集中している事などによる。



イリオモテヤマネコ



4 藻場・干潟・サンゴ礁

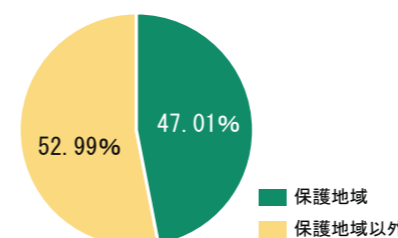
浅海域の生物多様性保全上重要な藻場・干潟・サンゴ礁について国立・国定公園との重なりをみると、藻場・サンゴ礁については4割程度がカバーされているが、干潟についてはわずかしかカバーされていない。

ただし、国立公園の海域の大半は規制の緩い普通地域であり、海中公園地区で担保されているのはごくわずかとなっている。

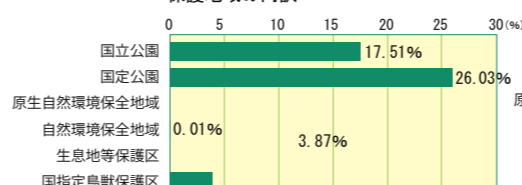


石西礁湖のサンゴ礁(西表国立公園)

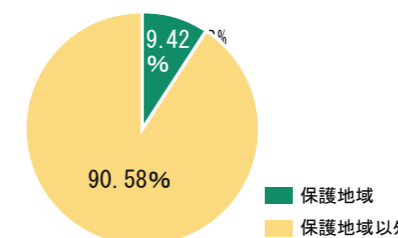
保護地域による藻場のカバー率



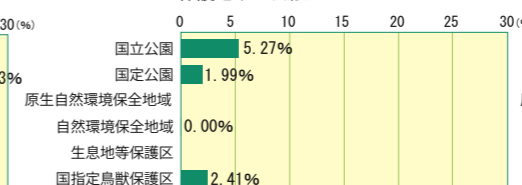
保護地域の内訳



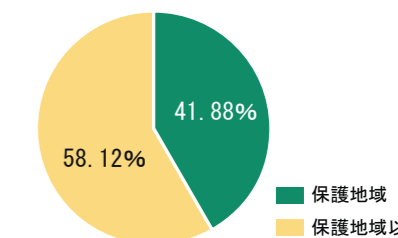
保護地域による干潟のカバー率



保護地域の内訳



保護地域によるサンゴ礁のカバー率



保護地域の内訳

